日野啓三『抱擁』試論

――《向こう側》の世界――

山根繁樹

はじめに

『抱擁』[1]には、霧子の次のような科白がある。

《「これが、これが向こう側よ」》

『抱擁』は、ある洋館に出会い、その世界に入っていく《私》を中心とした物語である。その《私》にとって、《向こう側》という言葉は、不可解な言葉としてあり続ける。そして、最後に行き着いた地下室で、霧子はこの科白を告げるのである。

石田忠彦氏は、牧《《私》》を中心とした〈無意識の世界における関係性がこの小説の構造〉であると述べ、〈新しい生命の創生の物語〉として『抱擁』を読み解いている。[2]この時、石田氏は、《向こう側》を、〈意識の深層ないしは無意識の世界〉と規定し、〈意識の変容、生命の進化、そして創生〉の場とする。しかし、私は、石田氏による《向こう側》の規定が、必ずしも『抱擁』における《向こう側》を的確に説明するものではないと考えている。

『抱擁』は、確かに、〈新しい〉何かの誕生の予感を孕んでいる。そして、それは、洋館に入った《私》が、どのように変化し、何を発見しようとするのかに関わっていると思われる。そうであるとすれば、《私》にとって謎であり、最後に理解しようとする《向こう側》は、『抱擁』において重要な意味を背負っているといえる。『抱擁』を〈ヒルドゥングスロマン〉[3]とみることも可能だが、そこでは、《私》が《向こう側》を理解しようとしていく過程こそが問題にされねばならないだろう。《向こう側》を理解しようとすることで《私》に獲得されたものとは何か。私は、本稿において、『抱擁』における《向こう側》の検討を通し、『抱擁』の作品世界を読み解く指標を提示しようと考える。

一、洋館にひかれる《私》

『抱擁』の語り手は、牧という男、すなわち《私》である。物語は、

《私》をひき寄せる洋館、得体の知れぬ不動産屋荒尾、魅惑的な《若夫人》、風変わりな《老人》、謎めいた少女霧子、と次々に現れる奇妙な存在に不安を抱きながら近づいていく《私》の意識によって貫かれている。《私》は、まず荒尾によって洋館の住人にひき合わされ、後に霧子の家庭教師を依頼され、やがては半強制的に洋館に移り住まされることになる。そして、最終的には、《老人》の死による遺産相続にまで関わることになるのである。

洋館を見つけることで《私》には様々な変化が訪れるのだが、それは、単に外発的な力のみによるものではない。《私》が洋館を見つけることになる冒頭の場面には、《私》が洋館に関わっていく姿勢の基調が、次のように示されている。

《本当の私はあのままバスに乗っていって影だけが残ってふらついているような、いや会社へと戻っていった方が私の影で、いま本当の自分が剥き出しになってしまったような、混乱した気持を覚えた。かすかに不安で、しかも心の底の方で浮き浮きした気分が揺れ始めている。》

ここで明らかなように、『抱擁』の主人公としての《私》は、洋館を見つける前から、日常生活の軌道のみを生きているような《私》ではない。つまり、冒頭の場面に登場する《私》は、日常生活の軌道から逸脱しようとする《私》、そのことに不安を感じつつ、楽しむかのような《私》なのである。この後、空き地に入り込んだ《私》は、そこからの眺望の中に、一つの洋館を見つける。その洋館に見入っていた《私》は、荒尾と名乗る見知らぬ男の誘いに乗って、その翌々日、洋館を訪れることになる。

洋館を目の前にした《私》は、既視感と禁忌の念を抱く。

《いつのことだったろう。ひどく昔の気がする。私がまだ小学校に上がる前にちがいない。いまと同じような秋の暮か冬の初めだったのだろう、荒涼と赤ぐざらついた光の感触が子供心にも強くしみこんでいる。そんな夕暮に、山の手の住宅街のどこかを歩いている。一軒の洋館が夕日に染まっているのだが、それがひどく怖ろしく気味悪い。一緒に歩いていた女のひとが顔を寄せて囁いた――あそこで人殺しがあったのよ、あるいは、首吊りがあったそうよ、いやちがう、もっとねっとりと体に絡みついてくるようなこと、たとえば、あそこには気のちがった若い女がひとりで住んでいて男を誰でも呼びこむんですよ、それとも、姉弟が夫婦みたいに住んでるんですって、といったようなことだ。おとなの女が子供の私にそんなことを話しかけるはずはないのだが。その女がまだ若かった母だったようでもあるし、親類の若い女性だったようでもあってあいまいなのだが、そのときの恐怖感には、とても恥ずかしく悩ましい気分が濃くまつわりついている。》

《「あれは悪い家なのよ」と心の奥の方で死んだ母のような声がした。その声は密室の中を反響するように「なのよ」「なのよ」と繰り返しながら次第に小さくなっていった。》

洋館を目の前にした時、《私》の意識には、忘れていた洋館の記憶が呼び起こされる。そのことは、前述した《私》の姿勢と無関係ではない。日

常生活という現実の軌道から逸脱しようとする姿勢が、洋館を見出させ、そこに近づこうとすることを促している。その時呼び起こされる、洋館と関わることを禁じられた記憶は、日常生活の軌道を逸脱せずに、その意味では健全に現実を生きていくべきことを示唆しているのである。しかし、その記憶自体の内に、《私》を逸脱へと誘う親和力が潜んでいる。すなわち、禁忌は、関わってはならないものの存在を証しているのであり、その魅惑を《私》に自覚させもするのである。したがって、《私》が洋館に入ろうとするとき聞こえる《声》は、禁忌を犯そうとしている《私》に対する、日常生活の軌道に乗ってきた《私》、それを促してきた《母のような》存在からの警告だということができよう。しかし、《私》は、洋館に足を踏み入れる。そして、《私》は、謎と不安を抱きながら洋館の奥深くに入り込んでいくのだが、その謎と不安は、《私》自身が抑圧していた親和的なるものに近づこうとすることによって起こっているといえるのである。ここにおいて『抱擁』は、日常生活という現実を逸脱しようとする者の物語としての、進路を示しているといえよう。

そして、《私》は、洋館に足を踏み入れた時、次のように予感している。

《いま廊下は別に下に向かってはいないのに、窓のない地下室に引きこまれてゆくように恐ろしい。だが、それはある中心の場所をめざしているのだ、という予感もあるのだった。そこは深く奥まった場所のはずなのだが、そこまで辿りつければ他のどこよりも頭上が開いていて、真直にじかに空と通じることができる。それこそ私の心が最ものぞんできたことだったのだ、という気もしてくる。》

この予感は、《私》にとっての、洋館へ入り込むことの意味を示唆している。つまり、《私》が洋館にひき寄せられることには、《私》が自覚しないままに求めてきた《場所》の探究という意味が込められているのである。しかし、《私》自身は、この予感の内容を明確な目的として意識してはいない。この予感は、謎と不安を抱きながら進もうとする《私》にとって、一瞬見えた頼りない一筋の細い光であるといえよう。

また、《老人》の言葉の中にも、《私》が洋館に関わろうとすることの意味について示唆を与えるものがある。《老人》は、霧子の家庭教師を依頼する時、戸惑う《私》に、次のように言っている。

《「きみがあげる反対の理由などみなわかっている。それにきみがあの子に関心のあることも。きみはあの子に似ている。きみはさっき家というものは心の構造だといったが、全然異質な人間がこの屋敷に興味をもつはずがない。率直に言ってあの子は正常とは言えない。だがあの子の異常さには何かがある。きみもそうだ、とわしは思っている。それを見出すのはきみたちだ」

聞きながら私は少しずつ体が震えてくるような気がした。》

《老人》の言葉は、洋館にひかれた《私》が霧子と共に何かを《見出す》ことを予言する。ここで《私》は、《老人》の言葉を予言として理解するわけではない。しかし、この言葉は、《私》自身の予感とともに、明確には意識できていない洋館に関わることの意味を《私》に示唆しているので

ある。

二、《向こう側》という言葉

霧子の家庭教師として洋館を訪れるようになった《私》は、その第一日目に、ベトナムで失踪したという霧子の父親が、《向こう側に行く》と言い残して消えたことを家政婦の《小田さん》によって知らされる。《私》は、そのことについて、荒尾に、次のように質問している。

《「ところでひとつ聞きたいことがあるんだが。行方不明になった息子が言い残していったという向こう側とは何のことだい」

「そんなこともわかんないのか。少し考えればわかることじゃないか。あの息子はサイゴンの大使館にいたんだから、サイゴンから見て向こう側は、敵側以外の何があるんだ。ベトコンのことじゃないか」

「では共産側に逃げたのか」

「わかんねえんだな。あの頃、いろんな裏交渉があったんだ。事前に連絡をつけて、向こうさんの偉い人に会いにゆくわけさ」

「でも帰ってこなかったんだろ」

「それは戦争だ、手違いもあろうさ」

「よくわからない」》

この会話の後、《私》は、霧子の父親について、次のように感じている。

《結局よくはわからないが、どこかに消えていったというその人物に、ふっと身近な感じを覚えかけた。》

《向こう側》という言葉についての荒尾の理解は、ある意味で明快である。荒尾は、霧子の父親の失踪事件を、あくまでも現実的に理解しようとしているからである。ベトナムに二つの勢力があり、その一方にいた人間が《向こう側に行く》と言って消えたとすれば、反対の勢力の側に向かったと考えるしかない、というのが荒尾の理解である。それに対して、《私》は、荒尾の説明で十分納得することができない。そこには、《私》が荒尾のように、ベトナム戦争をリアルタイムで理解することがなかったという年齢差の問題もあろう。しかし、一方で《私》は、霧子の父親に身近さを感じている。そして、その身近さの要因が《どこかに消えていった》ということにあるとすれば、そこには、《私》自身の姿勢と通じ合う何かがあるといえる。そこで問題となるのが、《向こう側》という言葉なのである。むろん、その《向こう側》が何であるのかは、未だ謎である。そして、その謎についての《私》の理解を助け、それを促すのが、《老人》、そして、霧子なのである。

三、《老人》の言葉

《老人》は、洋館の周りを世界中の樹々で囲い、世界中から様々な物を集めて洋館の世界を造り上げた主である。《老人》が《私》に対し、洋館に関わる意味について示唆を与えることは、既にみた。《私》は、その《老人》について、次のように考えている。

《老年というものは、生涯の様々な偶然の体験、見聞、知識のうち余分

のものを削り落として、本当に自分に近く親しいものだけを選別して、自分の一生を次第に銀色の一本の線あるいは一筋の白光に収斂してゆくことだとばかり思っていた。実際そういうようにして、美しく枯れた老人を知らないわけではなかったが、この老人のやっていることはまさにその逆だ。彼は余分のものを狂ったようにかき集めて、一本の線を消そうとしている。老いとともに収斂するのでなく、時間を逆にさかのぼってひろがってゆく。誕生のときへ、さらにその奥の混沌へと後向きに進んでいるとしか言いようがない。》

ここで《私》が考えるように、《老人》の造り上げた洋館の世界は、《余分のもの》によって覆い尽くされているといってよい。そして、《私》は、《老人》の態度を、《混沌》へ進んでいこうとする態度だと考えている。しかし、《老人》自身がどこへ向かっていると自覚しているかは、明確ではない。《老人》は、短い眠りに陥った後、《私》に、《万物が産み出されている》場所の夢をみたと言い、付け加えて次のように言っている。

《「うん、素晴らしい夢だった。この頃だんだん夢が深くなってきた。向こう側に近づいているらしい」

普通他人の夢の話を聞かされるほど味気ないものはないのに、この老人の夢は不思議にそうではなかった。同じ場所にいたためだろうか、私自身もぼんやりそんな場面を心の奥に見たような気がした。》

この場面は、《私》が霧子の父親の残した言葉を知る以前の場面である。そして、《私》は、《老人》の《向こう側に近づいている》という言葉に特に注意を払ってはいない。したがって、《私》は、《老人》の言う《向こう側》を、いわゆる死後の世界、彼岸として受け取っているのだとみることも可能である。そして、後の場面で《老人》は、霧子の父親の失踪事件について、次のように語ってもいる。

《実際の事情はどうあろうと、精神的にはあの事件は自殺だ、とわしは思っとる。冷酷なようだがそれが正確な理解だ。》

《老人》が、霧子の父親つまり自分の息子の《向こう側に行く》という言葉をどのように受け止めているのか、その詳細は、必ずしも明らかでない。しかし、その息子の失踪事件について、《精神的には》《自殺だ》と言っていることから、《向こう側に行》こうとする意志を、死のうとする意志だと受け止めていることは、確かである。このように、《老人》の語る《向こう側》は、死後の世界という意味を色濃く持っているのである。だが、《老人》の生きる姿勢を《混沌》へ進もうとするものだと感受する《私》にとって、死後の世界としての《向こう側》が、いわゆる「天国」あるいは「地獄」のようなものとして理解されないことは明らかである。《老人》の語る、死後の世界としての《向こう側》は、日常生活という現実を空想的に延長した世界ではなく、そのような現実の根底にあるかもしれない《混沌》の世界を意味するものであろう。このように、《老人》の語る《向こう側》は、荒尾の語る《向こう側》とは次元を異にしているのである。しかし、《私》がその世界を明確には理解していないことも確かなのであり、その意味では、《老人》の語る《向こう側》は、日常生活と

いう現実を生きる人間が死によって至る世界として受け取られるというべきかもしれない。

《老人》の語る内容は、《私》にとって必ずしも十全に理解できることばかりではない。しかし、《私》は、《老人》の言葉に、共感を覚えたり、示唆を受けたりする。そして、先にも述べたように、そうであるからこそ、《私》を導く予言的な意味を帯びているのである。例えば、《老人》は、自分が造り上げた洋館の意味については、次のように語る。《老人》は、人間が変化するという確信から、人間が《物質の次元を越えた、自由な思念になるだろう》と言い、そのイメージが、インドで見つけ、玄関の扉に彫ってある飛天女なのだと言う。

《わしはエローラの石窟寺院の壁であの浮彫りに出会ったとき、体じゅうが震えおった。この思いはわしだけの妄想ではなかったのだ。空を行くあの優雅な自由。あの浮彫りに匹敵する像を、わしは世界じゅうのどこにも見なかった。インド人というやつは、あんな昔から考えるべきことはすべて考えぬいていたんだ。あの像に比べれば、西洋の翼のついた天使や聖霊など、野蛮な想像にすぎん。あれからわしはもう世界を歩きまわるのをやめて、この屋敷に閉じこもった。世界じゅうの樹で屋敷を囲った。これは世界という巣の中の卵なんだ。この卵の中から、飛天女が孵れ、と》

つまり、《老人》にとっての洋館は《卵》であり、《老人》は、そこから、新しい在り方で生きる人間が誕生することを夢見ているのである。そして、その《飛天女》となるべき人間として想定されているのが霧子である。《老人》は、死の前夜、《私》に対して次のように言っている。

《家族という絆は崩れ、人間はひとりで、古い幻想の剥げ落ちた世界と人生に直面して生きてゆかねばならなくなる。そうじゃないかね。わしの父親は戦争前に死んだが、家族、親類から部下たちまで枕許に集めて、大騒ぎして息を引き取った。これから先祖たちのところへ行く、お前たちがやってくるのを待ってるぞ、なんてな。ところがわしは死んだ肉親の集まってる墓の中なんていう幻影はない。ひとりで死ぬだけだ。そういう新しい人間のあり方が、あの子の心で試されているのだ、とわしは考えてきた。わしらとちがった新しい人間が誕生するのか、それとも人間は孤独の果てに滅んでゆくのか。わしに代って、きみにその行方を見てもらいたい。》

《古い幻想の剥げ落ちた世界》を、《ひとりで死ぬ》者として生きる人間の在り方。《老人》は、霧子に、そのような人間の在り方の可能性を見ようとしている。そして、その役目は、《私》へと引き継がれる。《混沌》へ向かって進むかのような姿勢で生き、霧子に《新しい人間》の行方を見ようとした《老人》は、以上のようにして、《私》に示唆を与え続けた。それでは、霧子は、どのような世界を見、《私》は、どうなっていくのであろうか。

四、霧子の見ている世界

《老人》の依頼によって霧子の家庭教師を引き受けた《私》は、霧子の自閉的な態度に戸惑いながらも、霧子の言葉によって垣間見せられる世界にひきつけられていく。霧子は、父親の行ってしまった《向こう側》について、次のように語る。

《やがて風が弱まってくると、霧子が大きく肩で息をついてから言った。

「みんな知らないんです。おとうさんがどこに行ったのか。みんなわかってないんです。母だっておじいさんだって。一緒にあれを見たのに」

「何を見たんだ」

「あの広い広い平野、頭の上からぎらぎらと照りつける太陽、影もない光です。どちらを向いても山はありませんでした。ぐるりと真直な地平線だけです。そこへ白く乾いた一本の長い長い道が……」

「その真直な道が……」

「ちがうったら」

と少女は苛立った。大きな目がいっそう見開かれ、スタンドの明りの輪の外の闇を懸命に見つめて妖しく光った。

「あそこは入口です。あの道を通ってゆくんです」》

霧子は、父親がどこに行ったのかを、誰も本当に知ってはいないのだと言う。それでは、父親が行った《向こう側》とは、どんな所なのか。《私》の問に答える霧子は、父親の行ってしまった《向こう側》について語りながら、霧子自身が《向こう側》に直面しているかのような緊迫感を《私》に与える。

《「からっぽで明るいだけなんです。影もありません。何ひとつ動くものも暖いものもないのです。すべてが光にさらされて剥き出しです。氷りついています。いえ、一分の狂いも隙もない鉱物の結晶です。息づまるように静かです。いまにも何か恐ろしいことが起こりそうで、何ひとつ起こらない。ガラスの中に封じこめられています。街は精密な模型で、人間はみなマネキンです。空気も固まってます。水も流れません」》

霧子がここで語るのは、一つの世界だということができる。その世界は、《息づまるように静か》な、《鉱物》の世界であり、そこでは、人間の営為といったものは、凍結されている。そして、父親の行ってしまったのは、地平線に囲まれた平野の一本道だったのなのに、霧子が語るのは、街や人間なのである。

一方、これを聞いた《私》は、霧子が幻影に怯えていると一度は考えながらも、霧子の語った世界の意外な身近さを、自己の感覚の内に見出す。

《幻影だろうか。少年のときゲームや旅行の途中で、急に仲のよかった友人たちが全く見知らぬ他人のようでしかなくなったときに、私の心がひそかに感じてきたのは、いま少女が語ったような世界ではなかったか。いやいまでも、私がひそかに不思議な現実感を覚えながら歩く埋め立て地や、夜更の地下道や、車も人もほとんど通らない土曜の午後のビル街は、幻影だろうか。私もこの少女の見ている世界の、少なくとも影を、確かに見ている。》

霧子の語る世界は、《私》にとって理解不可能な世界ではない。という

よりも、《私》は、霧子の言葉から、秘かに抱いていた外界に対する感覚や人間関係から隔絶してしまうような異和感が自分だけのものでないことを確認しているといえる。したがって、《私》は、霧子に導かれる形で、自己の内にある《向こう側》の世界への指向を確認していくことになる。

この後、洋館の住人となった《私》は、《若夫人》と肉体関係を持ち、それまで味わったことのない悦楽を得る。そして、そのために、しばらくの間《私》は、霧子の語った《向こう側》の世界に接近することがない。《若夫人》との関係は、《私》にとって、自己の内にあって解放されていなかった生の自覚を促すものであり、それまでの《私》の意識の枠をつき崩すものである。その意味では、《私》にとって、内なる自己を発見する契機であったといえるかもしれない。そして、そのこともまた、《向こう側》へ近づくためのステップとなっているのである。

《若夫人》との関係が続いている間も、《私》は、家庭教師として霧子と一緒に過ごしている。しかし、《私》は、霧子の見ている世界に入り込むことも、その世界を自己のものとして理解することもできない。

《だが風の荒れる夜には、やはり子供のように怯えるのだ。

「倒れるわ、もうちょっと強く吹いたら、崩れてしまう。この家は壊れるのよ」とうつろな目で宙を見つめて呟く。

思わず肩に手を置いてやろうとすると、はっと身を引いて「さわらないで、霧子に近づくと引きこまれるわよ」と叫ぶのだった。子供っぽく怯えきった少女の顔の裏から、冷やかな能面のような、ぞっとする冷笑的な薄笑いが浮き出してきて、別人のようにかすれた声が言うのだ。

「知らないのね、向こう側がどんなところか」

彼女の言う通り、私は知らなかった、まだその時は。》

霧子は、無機的で、日常的な現実とはいい難い世界を見ていた。それは、荒尾の語ったのとも、《老人》の語ったのとも異なる《向こう側》である。そして、霧子は、常にその世界に直面している。この後、《私》は、この霧子の《向こう側》を、自ら見出すことになるのである。

五、《私》の見出す《向こう側》

《私》は、ある日、霧子に呼び出され、二人で埋立地へ行く。そこには、何もなく広い土地と、晴れ渡った澄んだ空があり、《私》と霧子は、共に聞かれた気分を味わう。そして、その夜《私》は、《老人》から、自分の抱く新しい人間の在り方は霧子によって試されているのだと告げられる。昼間霧子と過ごした時間と、《老人》の言葉によって、《私》は、再び霧子の見ている世界へと近づいていくことになる。その夜更けに、《私》の部屋に忍んで来た《若夫人》は、そんな気分になれないという《私》に、結婚して屋敷の財産を自分たちのものにしようと持ちかける。その話の持つ現実感は、《私》にとって悪夢のようにも感じられ、《私》は、今の自分にとっての《現実》について、次のように思いを巡らせていく。

《この屋敷がもっている一種言いがたい独得の濃密な雰囲気、老人と語り合ってきた人生の真実、霧子が戦っている目に見えぬ心の世界、それ

らはいまや私にとって掛替のない現実だが（それに比べていつのまにか、昼の会社の世界がいかに影薄くなっていることだろう）、この女と荒尾の存在や彼らが企んでいる事柄、不動産としてのこの屋敷、相続法、精神病院などもまた現実にちがいないのだ。そして現実が剝き出しになればなるほどいかに悪夢に似てくることか。塔のようなマンションのベランダから都心の夜景を眺め渡しながら、のんきに会社に通っていたころの自分は、一体何だったのだろう。あれだって決して夢だったわけではないのに。》

これまで生きてきた自己、そして、現在剝き出しになってその自己を取り巻く日常が現実であることは、疑いない。しかし、《老人》の言葉や霧子の見ている筈の世界が《私》に働きかけてくるもの、あるいは、《私》自身の内でそれらに共鳴するものもまた、《私》にとっては現実となっているのである。そして、そちらの現実感が強まれば強まる程、洋館に関わるまでの《私》が、空虚に感じられる。《私》にとって、これこそが現実であると実感される世界は、まだはっきりと見出されてはいない。しかし、翌日《老人》が死んでいるのが発見され、洋館の崩壊が始まろうとし、霧子が地下室に籠ってしまう時、この現実感の逆転は極限に達し、《私》は、日常である筈の現実を捉えることができなくなるのである。ある日会社に向かっていた《私》は、次のような状態に陥る。

《実はもう何年も前から漠然とそうだった。それがはっきりと姿を現わしたのだ。

（略）

思い切って振り向く。何も起こっているわけではない。朝日に照らされたビルの壁と窓ガラス、歩道を急ぎ足に流れてゆく通勤者たち、車道の車、信号機。だがそれらがばらばらと言うか、それぞれの形に戻ってしまったと言うべきか、ビルは巨大なコンクリートの塊で、人たちは無声映画時代のニュースのように手と足をせかせかと機械的に動かしている自動人形に、車は勝手に動きまわる鉄の部品の集合体に見えた。

それは漢字の字をしばらくじっと眺めていると、次第に偏やつくりや冠に分かれ、さらにそれが直線や斜線や点のごちゃごちゃした群にしか過ぎなくなってしまうあの感覚にそっくりだった。[4]》

《私》は、事物を意味において捉え、それを繋ぎ合わせることによって成立するような世界を見出すことができなくなる。それは、人間が「人間」として生きる世界を見出すことができないということでもある。そして、それは、かつて霧子の語った《向こう側》の世界と酷似した世界なのである。消耗し、惨めな気持を抱きながら洋館へと戻り、そのまま地下室に降りた《私》は、偶然、積み上げられていた箱を崩してしまう。そのすさまじい音に、霧子は、悲鳴を上げ、怯える。その怯えた霧子の様子に、それまで腫物に触るように霧子を扱ってきた《私》は、苛立ち、地下室に積み上げられていたがらくたを引きずり出し崩し始める。そして、そこに現れた光景は、《私》が母親に聞かされたことで自分も見たような気になっている最初の記憶の光景、《焼跡》であった。

《そうしてこれまでは戸棚や壊れたドアや窓枠や丸めた絨毯、机、椅子、トランクなど大型の廃品ばかりが、埃をかぶって静かに放置されていただけの地下室の中が、色とりどりの物体とその破片、半端な日用品と遊び道具で、ほとんど足の踏み場もない状態に変わった。焼け焦げた物はなかったけれど、色が褪せ、錆に覆われ、あるいは中身がはみ出し、覆いが剝がれてちぎれた破片の一面の散乱は、私の記憶の最も底を思いきりかきまぜる。黄色い澱のようなものがいっせいに舞い上がって、視界をゆっくりと漂い、次第に赤黒く染まる。夕焼けのようだ。一面にざらついている。焼跡らしい。どこかで壊れた水道が滴り続ける音がする……。》

《私》が外界の光景として見出すこの《焼跡》は、同時に、《私》の記憶の《最も底》にある光景でもある。それは、《私》の中の最も深い処にあった光景なのであり、《私》の内部の光景だといえる。《私》はまだ《私》の内にとどまっている。この時、霧子に近づこうとした《私》に向かって霧子は言う。それが、冒頭に掲げた言葉である。霧子は錯乱しているように見え、《私》は、霧子に対し自分が牧であることを伝えようとするが、霧子には伝わらない。そして、《私》は、そんな霧子に怯えながらも、逆に、霧子に誘い出される自己を意識する。つまり、《私》も霧子の言う《向こう側》に足を踏み入れようとするのである。その時、家政婦の《小田さん》が物音を聞きつけてドアの外にやってくるが、《私》は、《小田さん》を拒むことによって、《小田さん》のいる世界、すなわち日常的な現実世界から隔絶してしまうのである。

《小田さんは納得した様子ではなかったが、やがてドアの前を離れた。足音は一度立ち止まったらしいが、それから小走りに遠ざかった。何かがぷつりと音をたてて切れた気がした。

洪水が方舟の中まで入りこんできた、と地下室を見渡しながら思った。膝ががくがくと崩れそうだった。様々な物体が、用途と機能を失った破片が、波打際に打ち寄せられた難破船の残骸と積荷のように散乱していた。見えない濁水の中を漂っていた。私自身も水中を浮いたり沈んだりしている。自分の足で踏ん張るところがない。胸の中を、水が、木片が、虫の死骸が通り抜けてゆく。目だけは見開いているのに、それも閉じてしまいたい。体も心も見えない洪水に委ねてしまいたい。黒い渦に巻きこまれてしまいたい。

あの男も多分こうだったのだろう、と自然に思った。霧子の父のことだ。(略)霧子がいつか言ったように、仕事でも秘密の任務でもなく、彼はテロと陰謀の渦巻く街から、こんなむなしい思いのままに、デルタの大平野の果てへと、白い一本道を歩み消えて行ったにちがいない。ある日、ふっと。

だがその道を、彼はどこかに行きついたのだろうか。強いめまいを覚えた。》

《私》は、ここで、自己の現実として《向こう側》を見出している。それは、用途と機能を失い、物自体となった事物が散乱し、その中に自己存

在さえもが外界との区別無く物自体として捉えられる世界である。《見えない濁水》といった言葉は、明らかに矛盾しているが、ここでは、そのようにしてしか捉えられない世界が見出されているのだといえる。《私》は、このようにして《向こう側》を見出し、霧子の父親をも理解しようとしている。しかし、《向こう側》が、人間存在そのものの解体をも強いるような世界だとすれば、《どこかに行きつ》くことは可能なのだろうか。《私》が霧子の父親について抱いた疑問は、既に《私》自身への自問でもある。そして、次のように怯えきった霧子も、おそらく同じ問題に直面しているのである。

《「近寄らないで、向こうに行って。いいえ、助けて、抱いて。こわい、こわいよう」》

六、《私》のヴィジョン

《私》は、意識を取り戻した時、地下室のベットの上に寝かされていた。霧子が泣き叫んでいた後のことで覚えているのは、次のような夢だけである。

《そして私はひとりではなかった。もうひとりの同じような胎児が、一緒に水中に浮かんでいた。二本の臍の緒がふたりの体を巻きつけ、ふたつの胎児は小さな手足で抱き合った格好になっている。一方が私で、もう一方は霧子だとわかっているのに、ふたつがふたつのままでひとりの私だという気もしている。》

《ありえないことではないとしても、これまでにない新しい何かが、創られ生まれ出ようとしているようだった。》

《向こう側》の世界を見出し、そこから行き着くのは何処なのか自問した《私》は、胎児として霧子と抱擁する夢を見た。そこでは何かが生まれようとしている。しかし、それには、《強い思念の集中》が必要であり、《私》が躊躇した途端に夢は途切れてしまったのである。《向こう側》の世界、あらゆる事物が意味を失い、人間存在もまたその自己限定を保ち得ない世界、そのような世界を見出し、それを現実として実感しながら、なお、人間存在としての在り方が可能だとすれば、それはどのような在り方なのであろうか。《私》の夢は、その答えを得る前に途切れたのである。しかし、目覚めた後の《私》は、整地されようとする洋館のまわりの林を見ながら、崩壊する洋館を実感し、目を閉じて次のような光景を見出している。

《輪切りにされたような白い円柱の部分がごろごろと転ったその残骸の上を、軽やかに歩きまわる少女の姿が見えた。透きとおる長い白衣の裾をひるがえしながら、少女は白い頸を起こし、しなやかに手脚を動かして、宙を歩くように動いている。長い髪が肩で踊る。引きしまったふくらはぎ、波を打つようにしなう指。本当にいまにも軽々と空に舞い上がるようじゃないか。方舟が新しい約束の岸に着いたのだ。廃墟は舟の残骸だ。怯えと物質の暗い重力の殻を破って、いま蛹が変身する。開かれた気分が晴れやかに、あたりにみちている。

幾度も幾度も生まれ変わりながら、私たちはこの時を夢み続けてきた

のだ。こみあげるようにそう思った。涙が出そうだった。

またひと波、窓枠をゆするブルドーザーの震動を掌に感じながら、明日にも病院へ霧子を連れ戻しに行こうと思う。》

『抱擁』の最終場面であるこの部分において、《私》は、廃墟の上で宙を歩くように動く少女の姿を見ている。それは、洋館の世界に入り込み、《向こう側》の世界を見出すに至った《私》が、最終的に獲得したヴィジョンである。それは、人間が造り上げた現実世界にではなく、その根源に在る混沌とした世界から舞い出る新しい人間存在の在り方のヴィジョンだともいえよう。しかし、《私》が獲得したのは、あくまでヴィジョンでしかなく、人間存在は、変化しきっていない。《私》は、このヴィジョンを抱きながら、霧子と共に、未来に向けた出発を期そうとしているのだといえる。

以上のように、『抱擁』において、《向こう側》は、人間の意識が意味付けることによって見出す世界ではなく、あらゆる事物、人間存在さえもがその意味を失う世界として見出される。『抱擁』を生きた《私》は、自己の内にあった現実感を解放し、日常である筈の現実感を失うことで、《向こう側》を見出した。つまり、《向こう側》という言葉は、《私》に対して、内に秘められている現実感を解放させる誘惑として機能していたのである。そして、《向こう側》の世界を見出すことは、人間存在が、根源的に、いかに在り得るのかを問う問題としての意味を帯びている。私は、以前、日野の小説第一作である『向う側』の分析を行った。[5]『向う側』においては、『抱擁』の霧子の父親にあたるような失踪者を追う《私》の意識が捉えられ、《向う側》は、言葉によって意味付けられていない世界として暗示されていた。そして、この『抱擁』において、日野は、小説『向う側』の次の世代にあたる人物を登場させながら、《向こう側》そのものに足を踏み入れようとする《私》の意識を捉えている。つまり、日野は、《向こう側》を人間存在の在り方を問い返す世界として提示しつつ、人間存在の在り方についての開かれたヴィジョンを提示しようとしたのである。そして、それは、『向う側』以来一貫した日野の問題意識の、一つの到達であるといえるのである。

註

(1) 「すばる」一九八一年一・三・五・七・九月号。引用は、単行本『抱擁』(一九八二年二月　集英社)に拠る。

(2) 「日野啓三論　父の風景」(「叙説」V一九九二年一月)の中で、石田氏は、次のように述べている。

〈『抱擁』(一九八二年)における「向う側」は意識の深層ないしは無意識の世界である。失踪した霧子の父親は、短篇小説「向う側」同様のベトナムの解放地区に消えたということになっているが、それはかならずしも物理的な空間を意味するのではなく、「ある日、ふっと――歩み消えて行った――どこか」なのであり、彼の無意識の世界に消えたのである。〉

(3) 池澤夏樹「解説」(集英社文庫版『抱擁』一九八七年一月)。

(4) この場面は、中島敦『文字禍』を髣髴とさせる。ここを端緒として、中島の論理と日野の論理とを比較検討することも可能であろう。今後の課題としたい問題である。

(5) 拙稿「日野啓三『向う側』論——言葉の外部へ向かう試み——」(『近代文学試論』第31号一九九三年一二月)を御参照頂ければ幸甚である。

付記

本稿は、平成六年度広島大学国語国文学会春季研究集会(平成六年六月二六日於広島大学)での口頭発表をもとにまとめたものである。席上、またその他の折に、多くの方々より貴重な御教示を賜った。ここに記して心より御礼申し上げる。

——やまね・しげき、本学大学院博士課程後期在学中——